

礼服―天皇即位儀礼や元旦の儀の花の装い  
初版第1刷【正誤表】

一四五頁 二行目

この礼冠と凡冠の二具が八角柱形の小櫃に一緒に ↓ 傍線部五文字削除

二一七頁 後ろから七行目

仙戸親王 ↓ 他部親王

二四九頁 後ろから五行目

この礼服蔵 ↓ この礼服倉

二五一頁 一行目↘

そしてこの礼服は光明天皇の礼服と共に仁和寺宝蔵に預けられている(同上)。あるいはすべてが焼失しないように後になって男帝用と童帝用のものは別の場所で保管されたのだろうか。二合の内の：

二五一頁 後ろから五行目

平安末期より、即位の天皇の礼服と、大嘗祭の天皇の神事装束の着装は、

二八一頁 後ろから三行目

ルビ さめがい ↓ さめうし

三三九頁 後ろから五行目

「大嘗大祀」を「大嘗の大祀」と ↓ 「大祀大嘗」を「大祀の大嘗」と

四二二頁 注二 《末尾に増補》

なお、李勣墓出土の「三梁進徳冠」とされる冠が昭陵博物館に所蔵される。この冠には梁とみられる三本の筋があるが、『唐六典』等によれば、三梁があるのは諸王の遠遊冠と、諸臣の進賢冠の内で三品以上のものであり、進徳冠に梁があったという記載はない。またこの李勣墓出土の冠には唐草と花形の装飾があらわれる。日本の冠がこうした唐の冠の影響を受けた可能性は高いが、「押鬘」の名称は古代の髪飾りに起源するし、花形に玉を加えて存在を強調するのも、「花を装おう」伝統を踏まえていると思う。

四二八頁 注二四 《末尾に増補》

なお、四本の柱を持つ冠架は、現在八角形の冠櫃に納められる。この櫃は『礼服礼冠目録断簡』によると聖武上皇の冠の容器とみられる。ただし、櫃の高さは四九センチ、架の棒は四三・五センチである。棒は斜めに立つが、それでも櫃の底板や蓋の厚みを考慮すれば、冕板を納めるには余裕が少ない。武田氏の仮説のように冕板をはずして四本の棒にかけたとすれば、現存しない孝謙天皇の冠櫃から移された可能性が高い。なお、「肩に等しい」(冠の底辺よりもさらに顔面十頸

の長さが加わる(まで垂れるとされる旒が、櫃の底にわたかまるのを防ぐためにも、冕板をはずして収納することには合理性がある。

四三三頁 注四〇

この件については注36の↓この件については注37の

四五三頁 追加

田島公「古代官撰史書・儀式書の写本作成」 禁裏公家文庫研究 第5輯 思文閣出版  
二〇一五年

四五四頁 系図

仙戸親王 ↓ 他部親王

以上